

西南学院小学校 学校長メッセージ

「学校通信 Wings 2019年12月号」

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。 ヨハネによる福音書3章16節

今年も最後の月となりました。毎年のことながら街角は早くもクリスマスのデコレーションで彩られています。子どもたちにとってクリスマスといえばサンタクロースかもしれませんね。日本では、サンタクロースといえば子どもたちにプレゼントをくれる優しいおじいさんとなっています。もちろんそれはそれでいいと思うのですが、普段あたりまえと思っていることでもときには立ち止まって改めて意味を考えてみることも大切ではないかと思えます。

サンタクロースは、4世紀頃小アジアの司教だったセント・ニコラウスが、貧しさに苦しんでいる家を真夜中に訪れ、金貨を投げ入れたという伝承がその起源だとか。そのとき煙突から投げ入れたとか、暖炉に干してあった靴下のなかに金貨が入ったとか、さまざまな言い伝えがあるようです。サンタクロースのお話は、長い時間の流れの中で、時代や地域の影響を受けながら広がっていったので、服の色が青だったり二通りのサンタクロースがいたり、国によって多少の違いがあるようです。ただ、思うのですが、サンタクロースが時を超えここまで人々に愛されてきたのは、その本来の姿が「(プレゼントを) もらう喜び」ではなく「与える喜び・分かち合う喜び」だったからではないでしょうか。もらう喜びは誰でも簡単に感じることはできますが、消えてしまうのも早いでしょう。与える喜び・分かちあう喜びは、誰でも簡単に、というわけにはいかないかもしれません。しかし、心の奥底に温もりとなってじんわりとしみこみ長く留まるものではないかと思えます。

今年も、本校のアトリウムにはクリスマスツリーが飾られ25日には点灯式が行われました。12月1日(日)からは、キリストの降誕を待ち望む期間であるアドベントが始まります。チャペルでは「アドベントクランツ」と呼ばれる4本のろうそくに、毎週1本ずつ灯をともしていきます。また、1年生のページェントや6年生のハレルヤコーラスの練習も始まるなど、クリスマスを迎える準備が進んでいます。この時期、毎年6年生の宗教委員が中心となってクリスマス献金の呼びかけを行います。寄せられたお金は、全額海外での支援活動や福祉施設、災害被災地の方々などに贈られます。お家の人に出してもらうのではなく、自分のお小遣いや貯金、お駄賃から自分に見合っただけの額を捧げてくれたらと願っています。

最近読んだ本の中で「自由と平等を両立させることは困難である」といった内容の文章に出ありました。自由のない世界など考えたくもありませんが、他者を思いやる心・隣人愛のない自由は、自己責任という名のもと弱肉強食の世界を生み出してしまいかねないのかもしれません。もしそうなったとしたら、たとえ「勝者」となれたとしても決して幸せは得られないのではないのでしょうか。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。」クリスマスを機にこの言葉に思いを馳せ、子どもたちには、自分に与えられた恵みに感謝し、それを自分だけのものとせず、分かち合ってもらいたいと願っています。そこにクリスマスの喜びと光とがあるのではないかと思えます。

すでにご案内をお配りしていますが、17日には、中高のチャペルを借りて、保護者の皆さまと合同でクリスマスチャペルを行います。ともに豊かなひとときを過ごすことができますよう、

お忙しいとは思いますが、ご出席をお待ちしています。

文責 宮崎 隆一